

原告意見陳述

原告 関根 真澄

2011年11月11日、私たちは泊原発の廃炉を求めて、第1次原告612人と弁護団68人で札幌地方裁判所に提訴しました。その後第2次原告621人と賛同人を加え約3,000人が「泊原発の廃炉をめざす会」を結成し、ニュースの発行や講演会などを定期的に行っています。私は現在、その会の事務局長をしています。関根真澄、通称関谷真澄と申します。個人的には、国際人権擁護NGOのメンバーとして30年以上活動しています。今回の裁判も人格権で争うということから参加しました。

さて、提訴から10年が経ちましたが、まだ裁判は継続しています。

昨年11月の口頭弁論期日で、原告の居住地のリストに基づき、原発から30km圏内と250km圏内に居住している原告の人数を主張しました。これに伴い原告の住所を再確認することになりました。定期的にニュースを送っている方

ちは転居されても住所は分かっていますでしたが、それ以外の方たちには住所確認の案内を送り、一人ひとり確認していきました。その際、20人以上の方が逝去されていることが分かりました。

前回で意見陳述をする予定だった元警察官の原告も、裁判長に思いを届ける前に急逝されました。その方は、元警察官という立場から原発のテロリズム対策について意見陳述する予定でした。いままでの原告とは違った視点からの意見陳述を裁判長にもぜひ聞いていただきたかったです。

(詳細は3P遺稿で紹介)

提訴から10年、その間、泊原発が2013年に再稼働申請してから8年、長く検討されていた案件に一つの答えが出ましたが、そのほか地震、津波、火山に関する審査は残り、順調に進むかは見通せていません。

北電はこの間の空白を埋めるべく、再稼働に向けて積極的に動き出しています。再稼働すると使用済み核燃料が増え、ますます、北海道は核ゴミのごみ箱として全国から狙われます。ハッキリしています。

これまで、何人もの原告が意

見陳述をしてきました。何故、原発を廃炉にすべきかの理由も述べてきました。私が裁判長に伝えたいことは、原発が単にリスクが高いということだけではなく、原発に頼らなくても効率よい安全なエネルギーの確保はそんなに難しくないと考えるからです。電力会社は既にあるもの(つまり原発ですが)を利用して、手っ取り早いエネルギーの確保を考えているから原発を手放せないのです。

再稼働すればゴミが出る。ゴミが出れば埋めなくてはならない。今ここで止めておけば、これ以上のゴミは出てきません。単純なことです。

北電のような全道屈指の大企業は、道民に対し倫理的にも模範を示すべきで、不安やリスクを担保にしたエネルギーで



はなく、安全なエネルギーを目指し、原発を手放すべきです。

私たちには未来の人たちへの責任があります。アイヌの方々や先人が残した大地は神様からの借り物であり、この自然を守り、そのまま未来へ残さなくてはなりません。

また、格言にある「老いたる馬は道を知る」とは、道に迷ったとき、老いた馬を放つて後をついていけば、迷うことなく道に出る。つまり、経験を積んだものは行くべき道を知っている。福島で知った経験から道を誤るな」という教えです。

北海道の上空は通常、西風が吹いていて、泊原発で福島のような原発事故が起これば、西風に乗って、泊から65km真東の札幌は直撃します。風に乗って流された放射性物質は600m程度の高さの狩勝峠を超え、十勝平野に流れ込み全道を汚染します。そうなれば農作物への影響は計り知れず、北海道のブランドは消滅してしまいます。

日本では昨年から最大震度5以上の地震が8回、多くの死傷者を出した集中豪雨など自然災害が続いています。特に昨年2月の福島県沖地震は最大震度6強を観測し、気象庁で

は2011年3月11日の東北大地震の余震と推測しています。

自然災害は人間では止められませんが、原発は人間の意志で止められます。

裁判長には、私たちの切実な声を聞いていただき、適切なご判断で早期に結審するようお願いいたします。

「結審となりました。」

私の意見陳述後、谷口裁判長は唐突に「結審します」と言いました。北電側の弁護団長の「ちょっと待ってください。相談します」という言葉をさえぎって「結審」と強く言いました。

まったく予測していなかったの、思わず後ろにいる弁護団を振り返り、「結審」となったことを理解しました。提訴から10年かかりました。

判決は5月31日に言い渡され、司法の判断が示されます。

道内外の1,200人余りの原告とそれを上回る賛同人のみならず、全国に良い報告ができることを祈っています。

泊原発の廃炉をめざす会
事務局長 関谷 真澄